

葛野大堰をめぐる水縁空間と丹波の山林開発

古閑 正浩

1. はじめに

京都市嵐山（史跡・名勝）に所在する一ノ井堰は、秦氏が造営した葛野大堰の後身とみられ、近代・現代でも保津峡の筏流しの終点として、洛西土地改良区（洛西用水）の取水施設として機能している。

『延喜式』木工寮車載条によれば、丹波国瀧額津から大堰川を筏によって大井津（嵐山）まで運び、そこから陸路で平安京へ運ぶ行路が記されている⁽¹⁾。平安時代後期では、修理職・柚役が丹波国に課され、内裏造営用の木材を供給する所領として山国・柚が重要な役割を果たしている⁽²⁾。奈良時代では、法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営に伴い、柚山の一つとして丹波山があげられる（福山 1934）。また、長屋王家が丹波柚を所有していることが知られる（森・渡辺 1995）。これらが示すところによれば、中央の造営に伴って、木材の主要な産地として丹波が位置づけられ、史料上では、奈良時代には機能していたことが知られる。この前史を探るには、考古資料が重要な鍵を握る。

『秦氏本系帳』によると、葛野大堰は秦氏によって造営されたというが⁽³⁾、その時期は知ることができない。古墳時代後期には、松室遺跡における灌漑用の大溝が開削されていること（平安京調査会 1985、小森・原山 1987）や、嵯峨野の古墳造営が隆盛期を迎えることから、葛野大堰の造営もこれに併行したことがひとまず推測される。田辺昭三は、桂川流域における各地域の古墳造営の併行関係を整理し、他地域が後期には縮小・減少傾向をたどるのに対して、嵯峨野が隆盛期を迎える点を指摘した（田辺 1970）。そうして、広隆寺（蜂岡寺）の造営に至るまで継続的に有力勢力が存在したことを示して、その背景に秦氏の入植と活動を想定した。ただ、嵯峨野に視点が絞られたため、秦氏の開発目的やその対象範囲、契機については、課題を残した。

ここでは、葛野大堰の上流域（丹波国桑田郡、船井郡）と下流域（葛野郡・乙訓郡）を一体的にとらえ、古墳造営と集落形成を手がかりにして、地域的な傾向を抽出したい。検討に際しては、支流域や山間部などの地理的条件、想定される交通路との関係、各地域の併行関係や隆替の画期性などに注目する。そうして、開発の領域、秦氏の勢力圏、屯倉などの諸史料との関係も手がかりに加えつつ、地域的な現象を浮かび上がらせることによって、丹波と山背の地域的な関係性や葛野大堰造営の背景を探ってみたい⁽⁴⁾。

2. 造墓の隆替と交通路

前期前半 向日丘陵、園部川流域で造墓活動が認められる。埴輪の生起以前の古墳として、前者では五塚原古墳、後者では黒田古墳があげられる。前者に後続する古墳として特殊器台形埴輪を墳頂に

用いた元稲荷古墳、埴輪Ⅰ期（川西 1988）にあたる寺戸大塚古墳・妙見山古墳があげられる。後者は、後続する中綴古墳の実態が不明であるが、前期後半に至っても垣内古墳へと継続している。出現期の古墳は少数であり、この地域の重要性を端的に示している。向日丘陵の西側から老ノ坂を抜け、大堰川の西岸沿いをつたって、亀岡盆地の北西端に達する山陰道の行路が、古墳時代開始期に当たって特に重視されていたことを示している。

前期後半 拠点的な造墓活動がこの時期に分節化する。桂川右岸は、主に四つの支流域に区分されるが、全ての流域で造墓活動がみられる。2代ほど造墓活動の継続がみられる。向日丘陵を除くと、これらは、まとまって古墳群を形成するのではなく、支流域のなかでも上流域と中流域に分かれて位置する特徴がみられる。この時期、突出した墳丘規模を誇る古墳がみられない。併存する有力者の関係は、敵対的であるのか、親和的であるのか、解釈の分かれるところである（古閑 2018）。

この時期、丹後では、全長 200 m 前後の規模を有する網野銚子山古墳・神明山古墳が相次いで築造されている。桂川右岸は、畿内のなかでは、丹後との往還路の出入り口に当たっている⁽⁵⁾。山背地域のなかでここに造墓が集中する理由は、こうした地理的重要性に起因しているとみられる。

丹波では、亀岡盆地の北西端では継続して園部垣内古墳が築造され、南東端では新たに向山古墳の築造が確認できる。いずれも山陰道の行路に沿っている。また、大堰川の上流で弓削川との合流点付近には、愛宕山 1 号墳が築かれている。この地は、後の山国柚の中心地に当たる。

中期 同規模級の墳丘が多地点で造営された前期後半の動向が終息する。造墓活動は、大規模化した古墳が突出した存在感を示す。一方、その他の地域では、一部の小規模古墳を除いて造墓活動が停止する。桂川右岸では、恵解山古墳が突出した存在感を示す。これは、この地域にとどまらず、淀川水系とそれを構成する木津川流域、宇治川流域を含め筆頭格の古墳として位置付けられる。これ以降、隔絶した大規模古墳は、木津川右岸の久津川車塚古墳、淀川右岸の太田茶白山古墳と地点を変えて変遷し、墳丘の大規模化も進行する。多くの地点で造墓が停止する状況を合わせて考えると、この時期は、集約的ともいえるべき造墓体制であったことを示す。久津川車塚古墳では栗隈屯倉⁽⁶⁾、太田茶白山古墳では竹村屯倉⁽⁷⁾が後に存在したことで知られる。これら屯倉の成因を求めると、造墓と周辺の灌漑整備⁽⁸⁾等を同時に行い、集約的な労働力を編成する体制だったのではないかとみられる。飛躍的に上昇した当該地の収穫物の収集・管理の拠点として後に設置されたのが屯倉だったのであろう。こうした場合、中期において淀川水系で、大規模古墳が地域を越えて変遷するあり方は、地域勢力の盛衰とみるよりは、地域の拠点形成が中央の主導によって順次なされたとみられる。

こうしたなか、中期後半に至って、新たな動向が発現する。桂川右岸では、向日丘陵の東辺の檜原一帯で、継続的な造墓活動が再興する。山田桜谷 2 号墳、巡礼塚古墳がこれにあたる。前期後半の天皇の杜古墳よりも約 1.2 km 北側に位置する。桂川右岸と嵯峨野地域を結ぶ物集女街道に沿って位置し、保津峡の入口と当該地を結ぶ唐櫃越の交点に当たっている。

大堰川流域では、亀岡盆地南西部で中期後半に至るまで榊塚古墳、瀧ノ花古墳の築造がみられ、前期後半にみられた山陰道沿いの造墓活動が小規模ながら継続している。これに加え、中期後半には、

大堰川左岸において造墓活動が生起する。中1号墳・天神塚古墳・坊主塚古墳・時塚一号墳があげられる。このうち、中1号墳・時塚1号墳は、周濠を伴う一辺25m前後の規模で、方墳群の主要古墳として出現する。

後期 桂川右岸では、多地点で造墓活動が展開する。檜原地域では、中期後半から継続し、山田桜谷1号墳・穀塚古墳・清水塚古墳・天鼓森古墳があげられる。向日丘陵の東辺では、物集女車塚古墳があげられる。これも物集女街道に沿う。長岡地域では、舞塚古墳・芝1号墳・井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳があげられる。これらは、丹波街道（山陰道）沿いに立地することが特筆される。これらの墳丘は、主に30～50m前後の規模に収まる。

桂川左岸（北岸）の嵯峨野では、この時期、突如として前方後円墳が生起し、造墓活動が継続する。片平大塚古墳・清水山古墳・天塚古墳があげられる。これらは、60～70m前後の規模を有し、桂川右岸の古墳よりいずれも大規模である。

大堰川流域では、右岸域で馬場ヶ崎2号墳・拝田16号墳があげられ、山陰道沿いで継続的な造墓活動が確認できる。後者は、右岸域では初の方後円墳であり、横穴式石室を採用する。左岸域では、後期になると前方後円墳の築造が継続する。保津車塚古墳・千歳車塚古墳・石堂古墳があげられる。

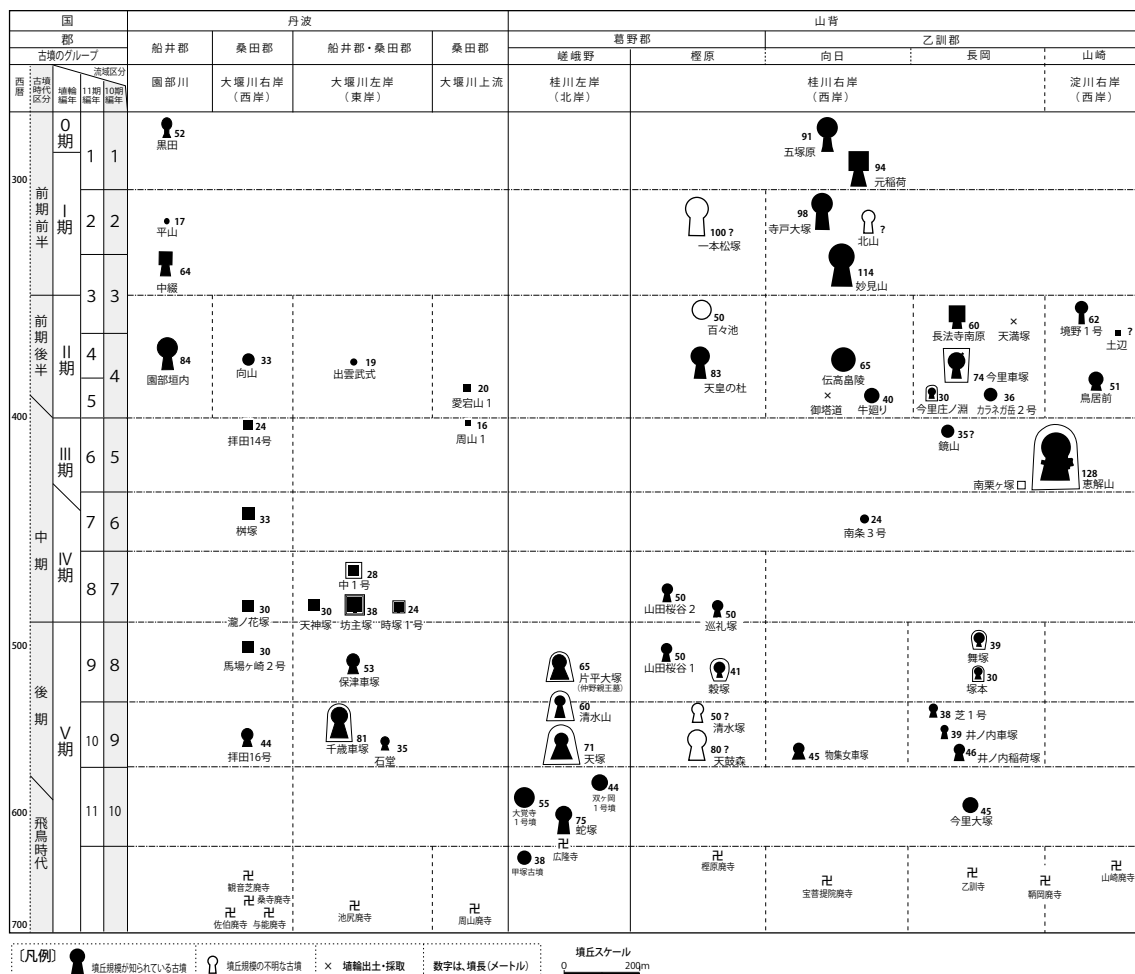


図1 大堰川・桂川流域における主要古墳の変遷

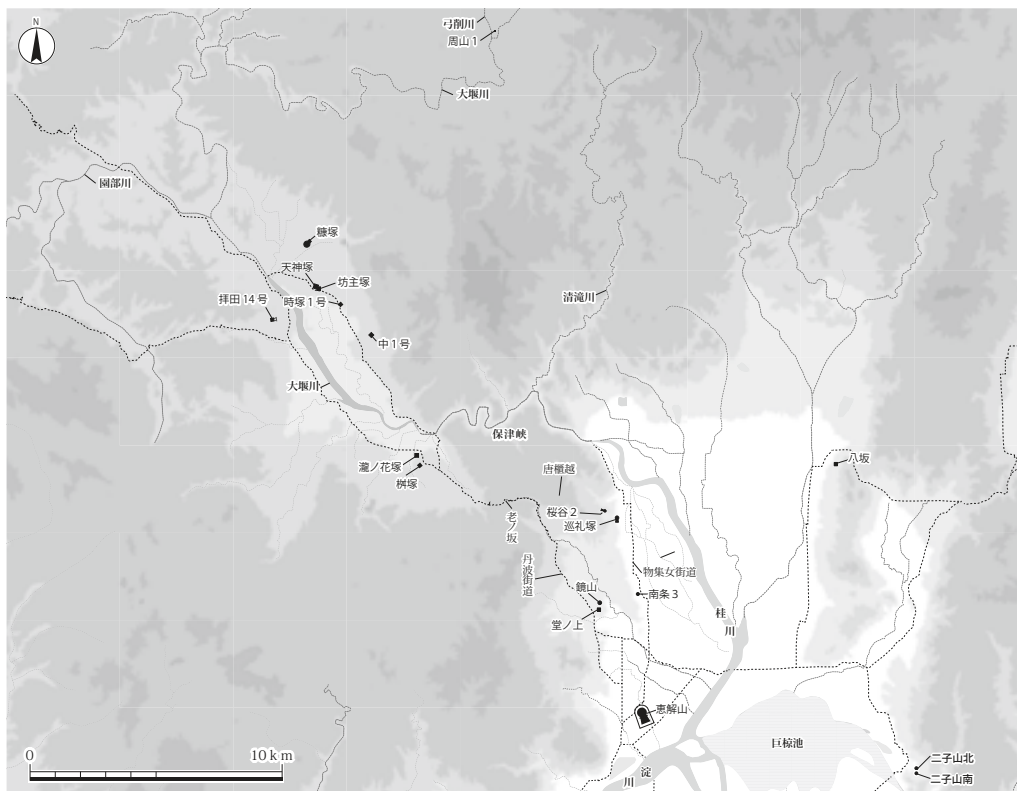


図2 中期における主要古墳の分布

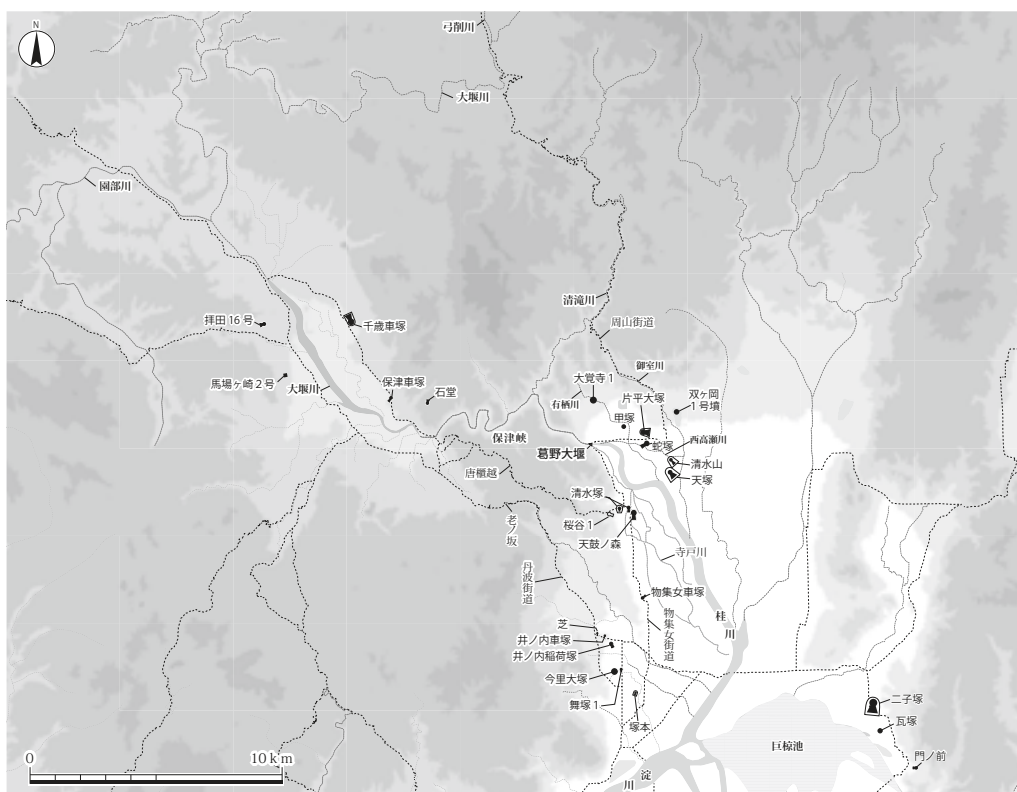


図3 後期における主要古墳の分布

保津車塚古墳は、盆地北西部（園部川流域）の前期以来の前方後円墳である。桂川右岸・嵯峨野地域の古墳と比較しても、上位の規模である。後続する千歳車塚古墳は、81 mの規模であり、桂川右岸・嵯峨野も含めて最大規模を誇る。

後期後半では、嵯峨野において、双ヶ岡1号墳・大覚寺1号墳・蛇塚古墳が造営される。前二者は、円墳であるが、50 m前後と大規模である。蛇塚古墳は75 mの規模に想定されている。いずれも巨石を用いた横穴式石室を採用している。蛇塚古墳は、桂川・大堰川流域の中で最大級の規模を誇る。桂川右岸では、長岡地域で継続して今里大塚古墳が築造される。巨石を用いた横穴式石室を採用し、墳丘の遺存状況は直径45 mの円墳とするが、前方後円墳の可能性も有する。

3. 集落の動態

図4・5には、大堰川・淀川流域の古墳時代中期・後期の集落の分布を時期別にまとめた⁽⁹⁾。

桂川・淀川右岸 庄内期から古墳時代前期にかけて、寺戸川流域の中海道遺跡・修理職遺跡・中久世遺跡、小畑川中流域の鴨田遺跡、坂川・風呂川下流の雲宮遺跡・水垂遺跡、小泉川下流域の下植野南遺跡が盛行している。前期で特徴的なのは、寺戸川周辺での活動が顕著に認められる点である。現在の寺戸川は、葛野大堰の後身の一ノ井堰から取水する洛西幹線水路の一つである。発掘調査では、この前身になる旧流路が複数地点で検出されており、古墳時代前期のシガラミによる堰遺構が検出されている（中島信親 2005、岸岡 2023）。また周囲では、水田も検出されている。この地点は、前期に拠点的な造墓活動がなされた向日丘陵の東側にあたる。中海道遺跡では、庄内期の祭殿に想定される建物遺構が検出されており、五塚原古墳の成立との併行関係が指摘されている（梅本ほか 1997）。

中期には、集落遺跡は、減少するものの、中海道遺跡・今里遺跡・下植野南遺跡で、韓式土器や初期須恵器が比較的多く出土し、拠点的な様相を示す（古閑 1996）。

後期には、中海道遺跡に替わって南に近接する殿長遺跡が盛行し、今里遺跡、下植野南遺跡は中期から継続して拠点的な位置付けを保持している。長岡地域では集落の増加が顕著で、井ノ内遺跡、開田城ノ内遺跡、下海印寺遺跡、友岡遺跡、神足遺跡などがあげられる。いずれも高位の扇状地から低位段丘上に立地する。下植野南遺跡・友岡遺跡・開田城ノ内遺跡・今里遺跡は、丹波街道に沿う行路上に位置する。また殿長遺跡は、物集女街道沿いに位置している。後期では、こうした丹波街道・物集女街道に沿って集落が分布する傾向を示している。

松室遺跡では、後期の大溝が検出されている。大規模なもので、幅は6.7 m、深さ1.6 mを測り、鎌倉時代まで機能している。葛野大堰から取水した用水の溝に比定されている（小森・原山 1987）。

嵯峨野 東側の御室川流域で集落形成が認められる。御室川左岸の和泉式部町遺跡において、前期から中期の集落が、上ノ段遺跡・常磐仲之町遺跡周辺において後期の集落が確認されている。後期では、広隆寺周辺に集落が集中する傾向を示している。御室川右岸では、西京極遺跡において、庄内期から古墳時代を通じて、集落が確認されており、拠点的な機能を担っていたことがわかる。

大堰川 前期では、大堰川右岸（盆地南西部）の犬飼遺跡が拠点的な性格を有する。左岸域では、

時塚遺跡・出雲遺跡・蔵垣内遺跡があげられるが、いずれも後期と比較すると小規模である。TK208 型式⁽¹⁰⁾ 期（5 世紀中頃から後半）にあたる中期後半には、集落が多く出現する。左岸域でとりわけ顕著であり、室橋遺跡・池上遺跡・里遺跡・池尻遺跡が上げられる。これらは、前期には、顕著な遺跡が認められない地域である。また、上流域の山間部に位置する天若遺跡でも集落が確認できる。右岸域では鹿谷遺跡でも左岸域と同様に中期後半に集落が成立している。このように、大堰川流域では、中期後半に全域で集落が増加し、後期を通じて継続する傾向がみられる⁽¹¹⁾。この点は、大堰川流域の史的展開を考える上で極めて重要である。特に左岸域で広域に展開し、上流の山間部にまでおよんでいる点が特筆される。天若遺跡は、近世以降、木材運漕の筏流しの中継点となっていた。1990～1993 年にかけて、約 13,000m²を調査し、古墳時代から 8 世紀中頃まで、合計 39 棟の竪穴建物が検出されている。報告では、竪穴建物の変遷が 8 期に区分されている。このうち、5 世紀末から 7 世紀前半（TK23 型式から TK217 型式）まで、常に 6～7 棟で構成される集落が存続している（三好 1994）。里遺跡では、2001～2003 年にかけて約 3,900m²の調査を実施した結果、64 棟の竪穴建物が検出された。未掘調査区を合わせると約 1,000 棟の竪穴建物が存在したことが予測されている（小池 2004）。竪穴建物は、TK208 型式期には、カマドを伴っていることが確認されている（高野・辻本 2008）。

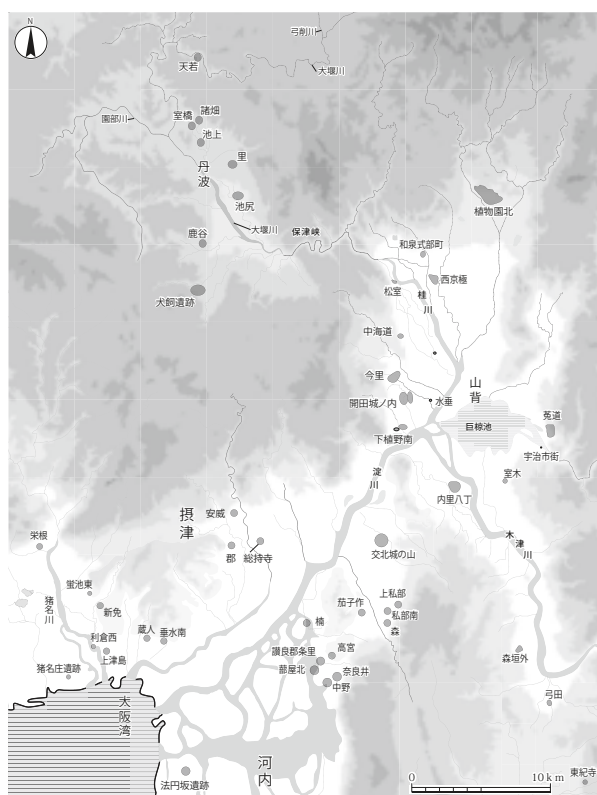


図4 淀川水系における集落分布（古墳時代中期）

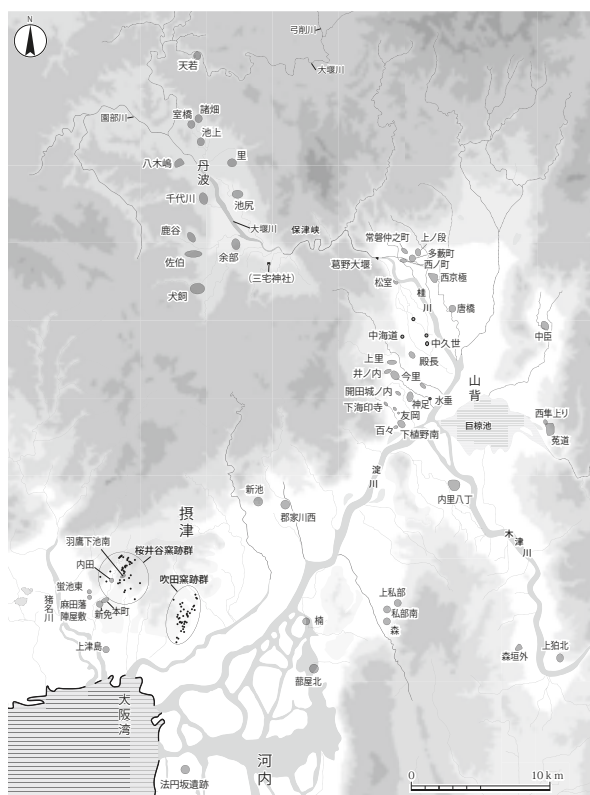


図5 淀川水系における集落分布（古墳時代後期）

4. 淀川水系における圏域の形成と屯倉

（1）大堰川・桂川を貫くもの

亀岡盆地・桂川右岸・嵯峨野を巨視的にみたとき、地域を越えた相互関係が浮かび上がってくるのは、中期後半から後期にかけてである。

桂川右岸域の主要古墳の立地は、丹波・嵯峨野へ抜ける行路を明らかに意識したものであるといえる。いずれも前期・中期の主要古墳の位置を踏襲するのではなく、中期後半以降の独自の現象である。松室遺跡の大溝の存在に注目すると、唐櫃越・物集女街道に沿う古墳の眼下には、葛野大堰の灌漑域が広がることも無関係とは思えない（図6）。

嵯峨野は後期に造墓活動が盛期を迎える。主要な前方後円墳が継続して築かれ、大堰川・桂川流域のなかでは、最大級か、それに匹敵する規模有する。これらは、有栖川・御室川に挟まれた平野部に分布し、さらに西高瀬川が横断する地点に近接している。西高瀬川は、葛野大堰付近から取水して灌漑流域を形成している。嵯峨野と山国峠は、周山街道で結ばれている。これは、薪を陸路で運ぶ重要な行路であった。前期末の愛宕山古墳の周辺は、後期になると群集墳が多く築かれており、山林資源を生業とする集団が存在したとみられる。

大堰川流域では、中期後半から突如として全域で集落形成が生じている。とくに左岸域で顕著である。造墓活動もこの動向に対応しており、この時期に活発化している。中古墳群や時塚古墳群は、平野部において小規模墳が群生したものである。この中で盟主的位相を示す一辺 25 m 前後の主要古墳（中 1 号墳、時塚 1 号墳）が、首長墓の末端を構成している。前方後円墳に注目すると、後期は、前期以来、長い中断期を経てこれが採用されている。特に左岸では、造営が継続しており、右岸よりも有勢であったことがわかる。とくに千歳車塚古墳は、大堰川・桂川のなかでも最大級を誇る。こうした中期後半以降の左岸の状況は、前代とは比較にならないほど人口が増加したことを推知させる。

筏流しの民俗調査によると、山国から嵐山まで 5 日を要している（地域資源活用実行委員会 2010）。この間、繫留する拠点が設けられ、その一つが天若遺跡に近い上世木村である。上世木村までの移動は、諸畑遺跡一帯から山道の行路が利用されている（図6）。こうした現代の生業の移動実態を参考にすると、左岸に集落形成が集中する理由は、山間部へ徒歩で移動する利便性を求めたからではないだろうか。こうした点を考え合わせ、天若遺跡をはじめ、左岸に集落が集中し、造墓活動が活発となる契機として山林資源開発を想定したい。千歳車塚古墳の存在を重視すると、その背景には中央権力の介在が想起される。

葛野大堰の築造は、この上流・下流の開発状況や松室遺跡の大溝の存在から、中期後半から後期にかけての時期に求められよう。大堰川流域の山間部・山林資源の開発やこの大溝の灌漑域の状況を考えあわせると、葛野大堰の築造は、当初から木材運漕の中継と用水の取水という二つの機能を併せ持つて成立していたことが察せられる。

小泉川流域の河口部付近に所在する下植野南遺跡は、MT15 型式期（6 世紀前半）には、集落が大

規模化する（古閑 2011）。しかし、この集団が造墓に関わったことを想定できる古墳が周辺には存在しない。下植野南遺跡の地形は、河口付近にまで舌状に張り出した安定した扇状地面であり、その隣接地は入り江が展開する。下植野南遺跡の集落の大規模化は、津の整備と関係づけ、大堰川流域から伐り出された山林資源を調達するための動向として想定してみてもどうか。

（２）安閑期の屯倉設置とその前史

ところで、安閑期には、26 箇所の屯倉の設置が記され、丹波には蘇斯岐屯倉が置かれた⁽¹²⁾。継体期までに実行された王権による地域政策に対して、それを管理するための機構や施設の設置がなされたものとみられる。

蘇斯岐屯倉の候補地は、現在の三宅神社付近に求める説がある（上田 1961）。この地点は、保津峡谷の入り口にあたり、近世・近代では、筏を整える重要な中継基地であった。これとは別に、亀岡盆地の南西部の曾我部地域に比定する説がある。桐井理揮は、TK43 型式期（6 世紀後半）に、犬飼遺跡の自然流路に集積した木材の特徴から、加工場（製材所）が周辺に存在したことを想定した。そして、屯倉と関係が深い「犬飼」や蘇我氏の管轄下にあった「曾我部」など、部民の存在を示唆する地名が付近に遺存することから、これらが蘇斯岐屯倉に関連することを指摘した⁽¹³⁾。菱田哲郎は、杣や筏流し等に関わる逸名の屯倉の存在を八木嶋遺跡周辺に想定する（菱田 2021）。山林資源の調達に関わる屯倉やその関連施設は、広い空間の多地点に存在していたことが想定される。

雄略期に遡ると、「桑によき國県にして、桑を植えしむ。また秦の民を散ちて遷して、庸調を献らしむ」とある⁽¹⁴⁾。後世の用字がみられ、慎重に扱う必要もあるが、政策として秦の民を移住させた点は、注目に値する。集落遺跡の動向として、大堰川の左岸・右岸ともに、TK208 型式期以降に多くの集落遺跡が増加する点は大きな画期といってよい。これと「秦の民」の移住を伝える動向が、一つの像として結びつくのではないか。この点でさらに気になるのは、亀岡市内の三ヶ所で松尾神社が存在する点である。大堰川左岸では旭町美濃田（延喜式内社）に所在し、里遺跡が接する。右岸では千代川町湯井に所在し、鹿谷遺跡に近在している。また、西別院町犬甘野に所在する。ここは、曾我部町から摂丹街道に沿って摂津側へ入った山間に位置している。京都市西京区に所在する松尾大社は、大山咋命と市杵島姫命を祀り、秦忌寸都理が大宝元年（701）に社殿を創建したと伝えられる。現在に至るまで、神官は秦氏が勤め、所領として古代からの封戸を受け継ぐ桑田荘を有している。上述の桑田郡の松尾神社も、松尾大社と同じ神を祀り、こうした共通性の背景に秦氏の活動が想定されている（本郷 1997、井上 1997）。大堰川流域における集落増加の契機には、やはり秦氏、秦の民の存在や、移住を主導した王権の介在が想定できるのではないだろうか。

継体期を中心にして、関連する動向を取り上げると、物集女車塚古墳（梅本 2011b）の存在が注目される。乙訓のなかでは早い段階で横穴式石室を採用している。円筒埴輪は、第 1 段突帯に断続ナデ技法がみられる一群に加え、須恵器系工人の関与が想定される一群が少量出土する。梅本康広によって、『東海系』埴輪』と称され（梅本 2007・2011a）、畿内の埴輪生産において三河や尾張など東海系の技術者が関与したことと、継体が尾張連の目子媛を妃に入れたこととの関連が注目される。

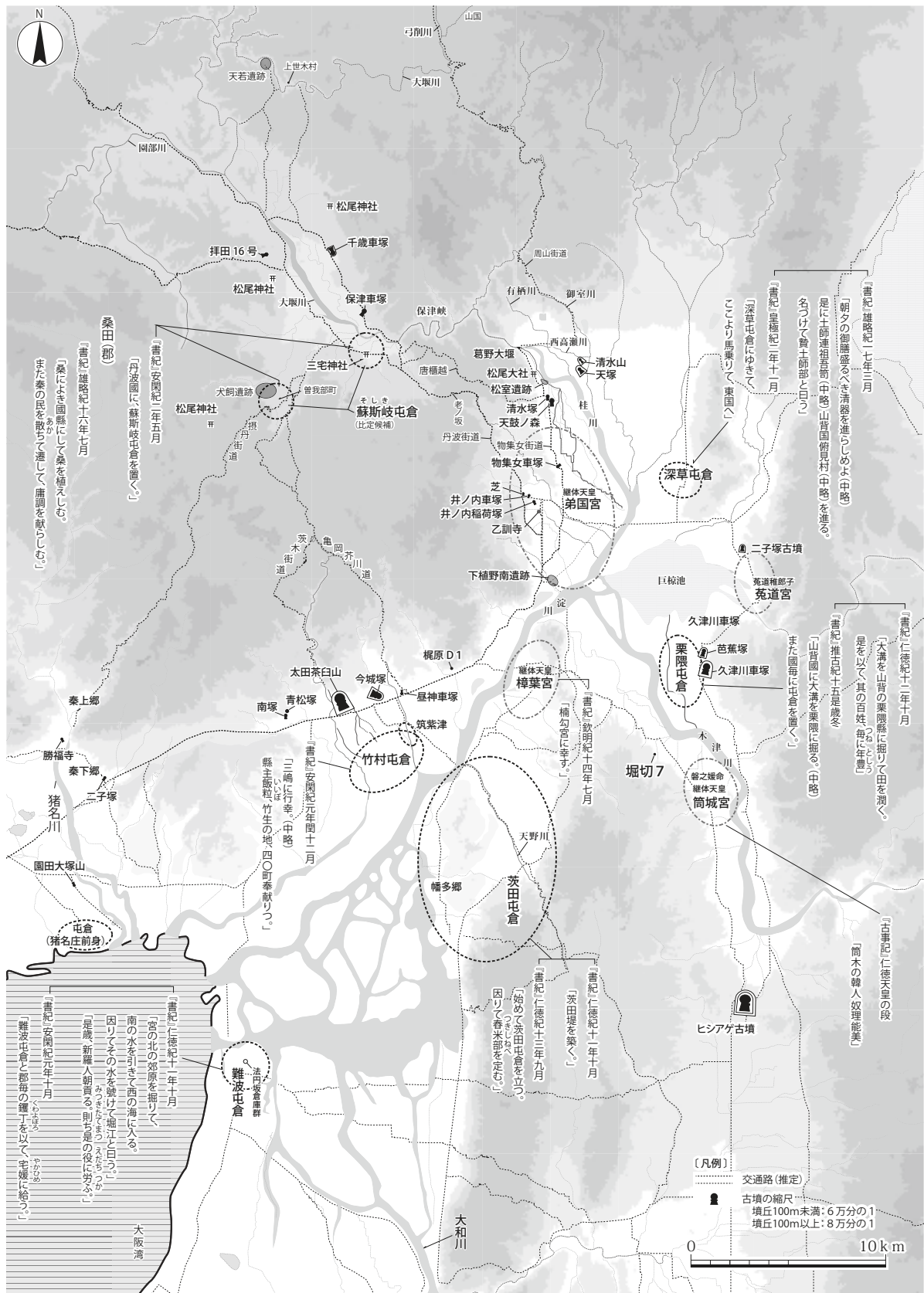


図6 淀川水系における宮・屯倉と関連遺跡 (1:30,000)

乙訓には、継体が筒城宮から遷した弟国宮が所在した⁽¹⁵⁾。大和の磐余玉穗宮へ遷る⁽¹⁶⁾までの8年間、ここを居所とした。残念ながら、所在地の直接的な手がかりはない。強いて候補地を挙げるとすれば、後期中核的集落遺跡である今里遺跡（乙訓寺下層）が注目される。ここは、丹波街道と物集女街道の分岐点にも当たっており、ここから丹波に向けて、井ノ内稲荷塚古墳・井ノ内車塚古墳・芝古墳が連接するように所在する。継体期より後出するが、6世紀後半の大型の掘立柱建物が検出されており（木村 1988、小田桐 2000・大高 2018）、拠点的な施設が所在したことを示している。

継体は、淀川流域の楠葉宮で即位し⁽¹⁷⁾、木津川流域・桂川流域に宮を変遷させた。磐余玉穗宮に入るまで、20年間にわたって淀川水系に拠点を置いた。桂川右岸における有力古墳が、丹波・嵯峨野へ抜ける交通路を意識して立地している点を重視すると、弟国宮を置いたのは、丹波への行路やその木材運漕の中継点が政策上、重要な地域として捉えていたことを示している。

物集女車塚古墳と強い関係を示すのが、摂津の南塚古墳（河端・金関 1955）・勝福寺古墳（寺前・福永編 2007）である。南塚古墳は茨木川と勝尾寺川に挟まれた北摂山地の山麓に位置し、山陽道に近在する。勝福寺古墳は、猪名川流域の上流域に所在する。これら三つの古墳は、導入期の右片袖式の横穴式石室を採用し、平面の形態や規模が類似する。また、東海系の埴輪が供給されている点でも共通する。南塚古墳と物集女車塚古墳は、二上山の凝灰岩製の組合せ式石棺を採用し、勝福寺古墳と物集女車塚古墳は振り環頭大刀が副葬されており、共通点が多い。南塚古墳では、断続ナデ技法の円筒埴輪がみられる。これも物集女車塚古墳との結び付きの反映とみた場合、同技法が採用されている芥川流域の昼神車塚古墳、猪名川流域の園田大塚古墳も親しい集団関係とみることができる。これらの古墳は、桂川・淀川右岸から北摂地域を通して千里丘陵の北側を抜け、猪名川流域に至る山陽道の行路によって、継体の政権を支える紐帯を形成している。

勝福寺古墳は、令制では河辺郡雄家郷に所在する。その猪名川の対岸は豊島郡秦上郷・秦下郷であり、秦氏の拠点のひとつである。猪名川の上流は木材の産地として知られており、近世では、紫合（猪名川町）までは管流によって、そこからは筏に組んで流していた。この猪名川流域では、秦氏とならんで木工集団の猪名部の存在が注目される。『日本書紀』応神紀三一年八月条によれば、新羅の献じた工匠が猪名部の祖先であるという。高橋照彦によると、猪名部首、猪名部造は物部系の祖先系譜をもち、6世紀前半までにこの地に進出して猪名部を管轄したと想定する。さらに、火焰皇子（宣化の皇子）を祖とする猪名公が猪名部を奉仕関係として従属させたとみる（高橋 2007）。加藤謙吉は、各地に展開した猪名部が秦氏と結び付いていることに注目し、その基礎は猪名川流域で形成されたとみる（加藤 1998）。

秦氏・物部系氏族・王権が、渡来系の木工集団である猪名部を取り込むことによって、猪名川流域に地歩を固めた。この点は、猪名川の上流域が、摂丹街道によって亀岡盆地の曾我部地域とつながっていることから重要である。既述のように、6世紀後半には、犬飼遺跡の周辺で、物部氏・蘇我氏・秦氏や蘇新岐屯倉との関わりが想定できる。両者が摂丹街道でつながっていることを重視すると、これらは一つの動向としてとらえた方が、理解しやすい。

摂丹街道は、途中で分岐し、茨木川沿いに茨木街道⁽¹⁸⁾、芥川沿いに亀岡芥川道⁽¹⁹⁾が派生し、北摂地域ともつながっている。芥川・安威川の中下流域には、先述した竹村屯倉が所在する。また、継体期に想定される「筑紫津」が、淀川水運の川津として芥川流域（筑紫津神社西側一帯、津江南遺跡）に推定されている（森田 2000）。先に葛野大堰・下植野南遺跡が桂川・淀川の水路の中継点として重視できることを述べたが、竹村屯倉や筑紫津もまた、これに連なる位置付けが与えられる。

論じてここに至ると、これらの帰着点として、難波地域に注目せざるをえない。ここでも安閑期に難波屯倉が成立しているからである。南秀雄は、難波屯倉の成立過程を上町台地の北端の動向に求める。5世紀前半の初期須恵器を生産した上町谷窯や、同後半に展開したガラス玉生産などの工房の存在、同第二四半期に造営された法円坂の巨大な倉庫群を屯倉の構成要素とみる（南 2013）。6世紀後半から7世紀前半にかけて展開した難波宮下層の建物群、鍛冶生産もその後の屯倉に関する施設として位置付ける。古墳時代中期からの重層的な動向によって屯倉が成立したとみる所見は重要である。難波地域の土器の出土量の傾向を追った田中清美によると、MT15 型式期が突出するという（田中 2013）。6世紀前半に消費が急増している点も特記しておきたい。

史料によると、物部連が舟師五百を率いた伴跋と戦い⁽²⁰⁾、近江毛野臣が衆六万を率いて任那に往く⁽²¹⁾など、継体期は朝鮮半島での緊張関係が続いていたことで知られる。派遣規模の数値の記述はともかくとしても、いずれも大規模な船団が不可欠であった。木材の調達手段を確立し、安定的に確保することが、政権にとって主要命題であったことが容易に察せられる。

5. まとめ

葛野大堰が築造された背景を探るため、大堰川・桂川流域の造墓と集落の動向を巨視的にみてきた。その結果、中期後半以降には、相互に関連する動向がみられた。

大堰川流域では、集落の増加が中期後半（TK208 型式期）において斉一的にみられる。左岸では、特に多く、上流の山間部にまでみられる点を重視して、この現象を大規模な山林資源開発に伴うものと想定した。それまで衰退傾向にあった造墓活動も隆盛化する。こうした集落や造墓の動向と秦の民の移住を伝える雄略紀の記述が一つの像として結び付く可能性についてもふれた。

後期には嵯峨野の造墓活動が生起し、大規模な前方後円墳が継続的に造営される。松室遺跡では、灌漑用の大溝が後期には機能していたことが確認でき、その水源は葛野大堰に求められる。嵯峨野は、山国地域と周山街道で直接つながっており、こうした地の利も後期には特に重視されたとみられる。

桂川右岸の造墓も中期後半から隆盛化し、大堰川流域へ向かう行路（丹波街道）と嵯峨野へ向かう行路（物集女街道）に沿って展開している。後者は、大堰川流域へむかう唐櫃越の交点でもあり、葛野大堰・松室遺跡の大溝の灌漑域から仰視される地点でもある。これら行路や灌漑域の整備と造墓が連動して労働力が編成されたことも推測されるところである。こうした一連の動向から、葛野大堰の築造は、中期後半から後期初頭にかけてなされたと類推される。

これらの検討を踏まえ、丹波の蘇斯岐屯倉が安閑期に成立する背景については、山林資源開発が軌

道にのり、その管理や運営のための施設が求められたことを想定した。そうして、その前史に着目し、これが北摂地域や猪名川流域、難波地域をも含む動向としてとらえられることを述べた。

継体期には、丹波の大堰川流域と摂津の猪名川流域が摂丹街道によってつながり、山陰道・物集女街道・山陽道が一連となって亀岡盆地・嵯峨野・乙訓・北摂・猪名川流域が貫かれ、大堰川・桂川・淀川では中継点の整備がなされていた。丹波・嵯峨野と難波を結ぶ陸・水の行路をタテ糸とすると、茨木街道・亀岡芥川道は全体の要路をつなぐヨコ糸の役割を果たした。この要の地点が北摂地域であり、継体の奥津城である今城塚古墳一帯である。竹村屯倉や筑紫津は、その結節点であった。こうした圏域の形成は、木材調達を円滑に行い、必要な物資や船舶を難波に集約するための手段であったことが察せられる。

註

- (1) 『延喜式』木工寮車載条とそれに関連する漕運については、橋本 1997 を参照した。
- (2) 『玉葉』文治五年(1189)十二月三日条。大村 2006 を参照した。
- (3) 『秦氏本系帳』『政事要略』巻五十四 交替雑事。井上 1971 を参照した。
- (4) なお、河川の名称について、同じ本流の水系ではあるが、丹波では大堰川、保津峡では保津川、山背では桂川と呼ばれることが一般的である。これらは、明治 29 年(1896)の河川法の制定により、行政上は「桂川」として名称が統一されたが、ここでは、歴史的な経過を重視して、嵐山の一ノ井堰より上流を大堰川、下流を桂川と称することとする。時期区分については、古墳時代の三時期区分(前期・中期・後期)に沿って述べ、暦年代との関係については、図 1 に示した。
- (5) 『日本書紀』垂仁天皇十五年秋八月条。
- (6) 『日本書紀』仁徳天皇十二年冬十月条。『日本書紀』推古天皇十五年是歳条。
- (7) 『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月条。
- (8) 栗隈大溝の有力な候補として、城陽市小樋尻遺跡の大溝が上げられる(公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2020)。淀川右岸の三島では、森田克行は、富田台地の西部を流れる五社水路の前身として「三島大溝」の開削を想定し、これが王権による開発とし、太田茶臼山古墳の前段階に位置付ける(森田 2018)。
- (9) 集落の動向については、以下の研究を参照した。
高野 2014、桐井・名村 2021、中島皆 2013、古川 2012～2013、大坪 2013、柏田・古川・浅井 2014、同志社大学歴史資料館 2017。
- (10) 須恵器の編年は、田辺昭三の案に準じた(田辺 1966)。
- (11) 高野 2014 表 1 12 頁。
- (12) 『日本書紀』安閑天皇二年五月条。なお、蘇斯岐屯倉をめぐる考古学的な所見については、既に概略を述べたことがある(古閑 2020)。
- (13) 桐井理揮のご教示による(桐井 近刊予定)。
- (14) 『日本書紀』雄略天皇十六年秋七月条。
- (15) 『日本書紀』継体天皇十二年春三月条。

- (16) 『日本書紀』継体天皇二十年秋九月条。
- (17) 『日本書紀』継体天皇元年春正月条。同年二月条。
- (18) 大日本帝国陸地測部 明治 44 年（1911）発行 正式二萬分の一「大岩村」の表記に準じた。
- (19) 大日本帝国陸地測部 明治 25 年（1892）発行 仮製図「大岩村」の表記に準じた。
- (20) 『日本書紀』継体天皇九年春二月是月条。
- (21) 『日本書紀』継体天皇二十一年夏六月条。

引用文献

- 井上満郎 1971「葛野大堰と賀茂改修」『古代文化』第 23 巻第 1 号
- 井上満郎 1997「寺社の文化」『新修亀岡市』本文編第 1 巻 亀岡市
- 上田正昭 1961「屯倉と條里」『篠町史』篠村史編纂委員会
- 梅本康広ほか 1997「中海道遺跡第 32 次～中海道遺跡北東部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 梅本康広 2007「淀川流域の東海系埴輪とその製作動向」『埴輪論叢』第 6 号 埴輪検討会
- 梅本康広 2011a「東海系埴輪の存在意義」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 88 集 248～250 頁
- 梅本康広 2011b「物集女車塚古墳築造の歴史的背景」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 88 集 252～254 頁
- 大高義寛 2018「乙訓寺第 24 次調査概要ー長岡京跡右京第 1165 次調査ー」『長岡京市文化財調査報告書』第 71 冊 長岡京市教育委員会
- 大坪州一郎 2013「山城地域」『古代学研究』199 古代学研究会
- 大村拓生 2006「嵯峨と大堰川交通」『中世京都首都論』吉川弘文館
- 小田桐淳 2000「右京第 598 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成 10 年度
- 柏田有香・古川 匠・浅井猛宏 2014「山城地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会 2014 年度拡大例会・シンポジウム 古代学研究会
- 加藤謙吉 1998『秦氏とその民』白水社（新装版 2009 年 139・140 頁）
- 川西宏幸 1988「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房（初出 1978 年）
- 河端眞治・金関 恕 1955「摂津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』第 38 巻第 5 号
- 岸岡貴英 2023「古代の開発における乙訓地域の特質ー水利灌漑技術の検討からー」『市大日本史』第 26 号
- 木村泰彦 1988「右京第 227 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和 61 年度
- 桐井理揮・名村威彦 2021「京都府における集落の構造と変遷ー丹波国桑田郡内におけるケーススタディー」『古代集落の構造と変遷』1 第 24 回古代官衙・集落研究集会報告書 奈良文化財研究所報告第 30 冊
- 桐井理揮 近刊予定「蘇斯岐屯倉と丹波の杣」
- 小池 寛 2004「里遺跡第 3・5・6 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 112 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- （公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2020『小樋尻遺跡第 10 次・11 次調査』現地説明会資料
- 古閑正浩 1996「京都府乙訓地域の韓式系土器・カマド形煮炊具の様相」『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会
- 古閑正浩 2011「下植野南遺跡・松田遺跡の古墳時代集落と須恵器」『松田遺跡』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 41 集 大山崎町教育委員会
- 古閑正浩 2018「オトクニにおける前期古墳の変容とその背景」『畿内乙訓古墳群を読み解く』季刊考古学・別冊 26 雄山閣

- 高関正浩 2020「桂川水系における集落の展開と造墓の隆替」第10回考古学研究会関西例会シンポジウム『地域研究に基づく古墳時代の集落構造と社会』
- 小森俊寛・原山充志 1987「松室遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 高野陽子・辻本和美 2008「室橋遺跡第11次」『京都府遺跡調査概報』第130冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子 2014「南丹波における古墳時代中期集落の動態」『古代学研究』第201号
- 高橋照彦 2007「猪名川流域の古代氏族と勝福寺古墳」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊
- 田中清美 2013「難波宮成立前夜の上町台地北部の手工業生産と流通」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』科学研究費助成事業研究成果報告書
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園
- 田辺昭三 1970「古墳と県主」（第1章第1節）「氏族の発展」（第2章第1節）『京都の歴史』1 学芸書林
- 地域資源活用実行委員会（亀岡市教育委員会内）2010『大堰川の筏をめぐる民俗技術』
- 寺前直人・福永伸哉 編 2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊
- 同志社大学歴史資料館 2017『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館調査研究報告第14集
- 中島信親 2005「長岡京跡左京第471次調査～左京北一条二坊一町 野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集-第1分冊-（財）向日市埋蔵文化財センター
- 中島皆夫 2013「乙訓南部地域における集落動向」『立命館大学考古学論集VI－和田晴吾先生定年退職記念論集－』立命館大学考古学論集刊行会
- 菱田哲郎 2021「丹波国船井郡域の開発と屯倉」『京都府埋蔵文化財論集』第8集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 福山敏男 1934「奈良時代に於ける法華寺の造営」『日本建築史の研究』綜藝舎
- 橋本義則 1997「杣・木材の漕運と京内の津」『長岡京左京出土木簡1』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16冊
- 古川 匠 2012～2013「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（1）～（5）」『京都府埋蔵文化財情報』第116～119・122号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 平安京調査会 1985「松室遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 本郷真紹 1997「国郡郷制度と農民生活」『新修亀岡市』本文編第1巻 亀岡市
- 南 秀雄 2013「難波屯倉と上町台地北端の都市形成」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』科学研究費助成事業研究成果報告書
- 三好博喜 1994『天若遺跡』京都府遺跡調査報告書第20冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森 公章・渡辺晃宏 1995「出土木簡釈文」146『平城京長屋王邸跡』奈良国立文化財研究所
- 森田克行 2000「継体大王の港津－三島の筑紫津－」『あまのともしび－原口先生古稀記念集－』原口正三先生
の古稀を祝う集い事務局
- 森田克行 2018「藍原の開発とヤマト王権－太田茶臼山古墳の築造から竹村屯倉まで－」『太田茶臼山古墳の時
代－王権の進出と三島－』高槻市立今城塚古代歴史館